

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32406

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05603・19K20810

研究課題名（和文）モーツァルト家三世代の書簡に関する言語意識史的研究

研究課題名（英文）Language Awareness in the Letters of the Mozart Family in three Generations

研究代表者

佐藤 恵（Megumi, Sato）

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：50820677

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者自身が作成した「モーツァルト三世代書簡60万語データ」をもとに、2018年度は量的分析を、2019年度には質的分析を行った。その結果、次のことが判明した。父レオポルトは高い教養のあった人物で、標準ドイツ語をほぼ毎回使用したのに対して、教養が高いわけではなかった母アンナは上部ドイツ語的方言形を家族内で最も多く使用した。父から直接に教育を受けたモーツァルトと姉ナンネルも、基本的に標準ドイツ語を用いた。父と姉の場合、手紙の受け手が家族であるときに上部ドイツ語的方言形が多く確認される。それに対してモーツァルトの場合は、方言の使用頻度は手紙の受け手が家族のときも家族以外のときも変わらない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

父レオポルトのドイツ語が標準文章語に最も近いのは、教育の程度の違いに由来すると考えられる（社会言語学的変数）。ただし、父レオポルトも、書簡の内容や文通相手によって非標準的な東上部ドイツ語的異形を交えて書いている（語用論的変数）。標準形と方言形の書き分けに上記のような社会言語学的・語用論的変数（教養の程度や世代、書き手と受け手の親疎関係、書簡の趣旨等）が関与していたことを、当時の書簡文から読み解くことができた。さらに、モーツァルト家三世代の書簡文を分析することで、18世紀中葉以降、東上部ドイツ文章語から東中部ドイツ語型の標準文章語に切り替わっていくプロセスを個人の言語使用に見て取ることができた。

研究成果の概要（英文）：This project examined the process of replacement of the Upper German written language by the High German written language in private communication. For this purpose, I created the “Mozart Family Letter Corpus” (600,000 words) from about a thousand letters of the family members of three generations. 32 High and Upper German variation pairs were analyzed from socio-pragmatic perspectives. The father Leopold Mozart was an educated man and used mainly High German variants, while many Upper German variants are found in the letters of his less educated wife Maria Anna Mozart. Wolfgang Amadeus Mozart and his sister Nannerl learned writing through private instruction from their father and both wrote High German in principle. Concerning the factor of the proximity to the communication partners, Wolfgang did not use Upper German variants in his letters to non-family members less frequently than in those to his family members. Wolfgang differs from his father and sister in this point.

研究分野：言語学

キーワード：ドイツ語史 歴史社会言語学 歴史語用論 言語の標準化 言語規範

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、前置詞の格支配を通時的に追うなかで、言語的実践の例として、モーツァルト家の書簡における *wegen* 等の格支配を調査する着想を得た。予備的調査をすると、モーツァルトと父レオポルト・モーツァルトでは、標準的異形(属格支配)と地域的異形(与格支配)との使い分けが異なっていることがわかり、言語データとしてモーツァルト家の書簡を分析対象とする意義をたしかめることができた。また、歴史上著名な人物の言語データを扱うことによって、言語的事実を歴史上の事実(史実)と照合することが可能となり、社会的属性や人間関係を正確に把握しながら分析ができると予測できた。

2. 研究の目的

ドイツ語圏の南東部においては18世紀中葉以降に、神聖ローマ帝国官房の伝統を汲むウィーンの東上部ドイツ文章語が声望を失い、ドレスデンを中心地とする東中部ドイツ語型の標準文章語に切り替わっていった。これは、言語使用者の側から見ると、地域的な異形(ヴァリエーション)よりも標準的な異形を優先するに至るプロセスである。本研究は、東上部ドイツ語圏出身のモーツァルト家の人びとが1755年から1857年まで三代にわたり書き綴った書簡文をデータとして、言語意識史の観点から言語の標準化のプロセスを解明しようとするものである。すなわち、モーツァルト家の人びとが書簡のなかでどのような社会言語学的・語用論的変数(出身地や教養の程度などの社会的属性、書き手と受け手の親疎関係、書簡の趣旨など)に従って東上部ドイツ的異形と標準的異形とを書き分けていたのかを再構成し、彼らの言語意識から言語史の展開に迫ることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

18世紀の東上部ドイツ語圏における言語使用を調査する資料として、モーツァルト家の人びとの(ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト本人のほか、父レオポルト・モーツァルトと母アンナ・マリア・モーツァルト、モーツァルトの姉ナンネル、モーツァルトの2人の息子カール・トーマス・モーツァルトとフランツ・クサーヴァー・モーツァルトの計6人、三代が1755年から1857年までに書いた)書簡文を集積し、機械可読のデジタルデータ「モーツァルト三世代書簡60万語データ」を作成した。分析対象となる異形として、(以下、方言形[東上部ドイツ語的異形](イタリック体)/標準形[東中部ドイツ語的異形]の順)1.音韻:ウムラウトの非円唇化(*glücklich* / *glücklich*)、破裂音弱化(*Disch* / *Tisch*)、名詞における語末音eの消失(*Sach/Sache*)2.形態:sein動詞(*wir seynd* / *sind*)、接尾辞(-*nus* / -*nis*)、ge-の脱落(*kommen* / *gekommen*)3.語彙:「火曜日」*Erchtag* / *Dienstag*、「鶏」*Hiendln* / *Hühnchen*等、33のペアを選び出し、異形選択の様子をコーパス言語学の方法で量的に分析するとともに、モーツァルト家の人びとにまつわる史実と照合しながら社会言語学的・語用論的観点で質的にも分析を進めた。

4. 研究成果

「モーツァルト三世代書簡60万語データ」をもとに2018年度は量的分析を中心にを行い、モーツァルトの母アンナ・マリア・モーツァルトが非標準的な方言形を家族内で最も多く使用していることがわかった。さらに2019年度は、書簡の質的分析(部分的に統計的処理)を行い、その結果、以下のような結果が得られた。(1)モーツァルトが故郷ザルツブルクに見切りをつけた1777年前後の書簡を比較すると、1777年以降のモーツァルトの書簡において、東上部ドイツ語的異形が減少している。(2)受け手が家族である場合に、東上部的異形が多く確認される。家族以外の親密な人間関係であった相手にも、東上部的異形が多く確認される。(3)父レオポルト・モーツァルトは、息子モーツァルトを叱っている内容の書簡では、東上部的異形を相対的に多く用いている。

母アンナ・マリア・モーツァルトが地域的異形を多く使用し、一方父レオポルト・モーツァルトのドイツ語が標準文章語であるのは、教育の程度の違い(社会言語学的変数)に帰することができる可能性がある。しかし父レオポルト・モーツァルトも、書簡の内容や文通相手によって(語用論的変数)非標準的な方言的異形を交えて書いている。さらに、モーツァルト三世代の言語使用を通時的に観察すると、二人の息子カール・トーマス・モーツァルトとフランツ・クサーヴァー・モーツァルトは兄弟同士の書簡であっても一貫して標準文章語で書くことを実践している。このことは、この時代のオーストリアの文書において、標準文章語が(教養人の)個人的書簡という私的空間においても普及していたことを意味している。つまり、モーツァルトや父、姉にとって東上部的異形は近しさ、インフォーマルさを表すものであったが、モーツァルトの息子たちが生きた19世紀には、東上部的(方言的)異形には社会層に関して低い評価が下されていたため、兄弟間の書簡においてすら、方言的異形を使用しなかったと考えられる。

以上のような研究結果について、ドイツ語史に関する国際集会「18世紀の言語使用と言語メタリテティ」(ドイツ・アイヒシュテット大学、2019年5月10日)および日本独文学会春季研究発表会(学習院大学、2019年6月8日)で口頭発表した。また、モーツァルト家の書簡を一

部資料として扱った内容を、**Simon Pickl and Stephan Elspass (eds.) (2019) *Historische Soziolinguistik der Stadtsprachen: Kontakt – Variation – Wandel***. Heidelberg: Winter, pp. 151-170. 所収の論文として公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤 恵
2. 発表標題 言語学から見た《旅するモーツァルト》
3. 学会等名 第25回 ひと・ことばフォーラム、東洋大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤 恵
2. 発表標題 前置詞の格支配に窺える「親密」「敬意」そして「疎遠」 - 19世紀前半のドラマと ベートーヴェンの筆談帳を資料として
3. 学会等名 第9回動的語用論研究会、京都工芸繊維大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Megumi Sato
2. 発表標題 Zum Sprachgebrauch in Briefen der Familie Mozart
3. 学会等名 Deutscher Sprachgebrauch im 18. Jahrhundert: Sprachmentalitaet, Sprachwirklichkeit, Sprachreichtum. (ドイツ連邦共和国、アイヒシュテット大学) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 恵
2. 発表標題 モーツァルト家の人びとが書簡に書き綴ったドイツ語 私人空間における標準語と方言の競合
3. 学会等名 日本独文学会春季研究発表会 (学習院大学)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Susan Fitzmaurice (中安美奈子訳)、青木博史、家入葉子、小野寺典子、川瀬卓、岸本恵実、桐生和幸、佐藤恵、新里瑠美子、高田博行、深津周太、藤原浩史、森勇太	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 『歴史語用論の方法』	

1. 著者名 Simon Pickl, Stephan Elspass, Arend Mihm, Nikolaus Ruge, Anita Auer, Rudolf Steffens, Helmut Graser, B. Ann Tlusty, Megumi Sato, Markus Schiegg, Jill Puttaert, Iris Van de Voorde, Rik Vosters, Markus Denkler.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Universitaetverlag Winter Heidelberg	5. 総ページ数 230
3. 書名 Historische Soziolinguistik der Stadtsprachen. Kontakt - Variation - Wandel	

1. 著者名 澤田治美・仁田義雄・山梨正明編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 792
3. 書名 『場面と主体性・主観性』	

1. 著者名 多和田葉子、浜崎桂子、川島隆、中直一、美留町義雄、真田治子、黒田亨、井出万秀、村瀬天出夫、佐藤恵、大喜祐太、高田博行	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 『ドイツ語と向き合う』(シリーズ ドイツ語が拓く地平2)	

1. 著者名 早瀬尚子、大橋浩、佐藤恵、尾谷昌則、松井智子、深田智、小島隆次、高梨博子、堀内ふみ野、中山俊秀、西田光一、吉川正人、加藤重広	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 - </td
3. 書名 『動的語用論の構築へ向けて』第2巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----